報告

一九六三年度歴史学研究会大会

安岡重明

今年度の歴史学研究会大会は五月十八日、十九日の両日、明治大学において行われた。昨年度と同じく、部会方式がとられ、綜合部会のほかに、五つの部会が行われた。

綜合部会　東アジア歴史像の検討

前近代史の立場から　堀敏一

近現代史の立場から　遠山茂樹

歴史教育の立場から　吉田悟郎

(A) 律令制の再検討

佐伯有清、田名網宏、彦由一太、村井康彦

(B) 日本における領主制の展開と構造

内田実、三木靖、坂口勉、北爪真佐夫、佐藤和彦

(C) 幕末維新期の社会経済構造—地域類型論の再検討—

(D) 産業資本期をめぐる諸問題

大石嘉一郎、岡田与好、北条功

(E) 帝国主義世界体制の構造と展開

斉藤孝、矢沢康祐

私の参加した近世史部会は(C)の「幕末維新期の社会経済構造」であって、この部会はつぎの諸報告からなっていた。

村山地方における領主権力の存在形態　青木美智男

村山地方における商品経済の発展と流通　守屋嘉美

幕末・明治期の産業体制と地主制の役割　安孫子麟

秋田藩の在郷商人　半田市太郎

秋田藩、幕末維新の政治過程　鎌田永吉

昨年度の近世史部会が幕藩制の諸段階をテーマとしたから、本年度は横断面を考える意味で、地域類型をとりあげたものであろう。しかし日本全体の地域類型を問題とするのではなく、東北地方内部の地域類型をとりあげたものであって、とりわけ、支配の側面と商品経済化の側面から、地域類型が論ぜられた。

村山地方について報告した青木、守屋、安孫子氏の問題のたて方と秋田藩についての半田、鎌田氏の問題のたて方は、異っており、前者は経済史的考察に重点があり、後者は維新変革の主体勢力をさぐるという政治過程に重点があり、両者の報告は同じ角度から整理されたものではなかった。

近世史部会については、すでに大野瑞男氏の適切な紹介批判があるので(歴史学研究月報 No. 43)、詳細ははぶくが、討論の席上、村山地方の非領国体制が一つの問題としてとりあげられ、私に意見を求められた。非領国体制が幕藩制の構成原理からはずれるものではないという点では報告者と私の意見は一致したが、私の不手ぎわのため畿内と東北の場合について異同をあきらかにするまでには至らなかった。青木氏は非領国の概念を、城下町を中心として領域経済市場を形成する条件の欠如を意味されたのであるが、これは私が畿内についてこの問題を考えた場合と完全には一致していないので、本誌本号においてこの点を整理してみた。